

奥州道中成立四百年

記念史跡めぐり

宿場町大澤

平成13年12月2日

案内 鈴木徳治

大沢町が奥州道中沿いに町屋を形成したのは何時の時か詳らかでないが大沢町の旧家福井家に伝わる古文書『猫の爪・瓜の蔓』等から考えられることは江戸時代のごく初期の頃ではないかと推測される。

大沢町の鎮守香取神社は鷺後の香取神社を現在の地（大沢三丁目）に移したものでその年代は『猫の爪』によれば寛永の頃ではないかと書かれている。（寛永2年が1625年）それまでは鷺後や高畑に居住していた百姓達が日光道中が整備されるにつれ往還ばたへ追々移り住むようになり町屋を形成していったものと考えられる。承応・明暦の頃（明暦元年が1655年）大沢町が越谷宿へ加宿となった頃は町屋に建ちつらなっていたらしい。

#### 大沢の地名について

大沢という地名についてはこの辺りといったが江河沢沼であった頃其の内の大いなる津という意味がいつしか大沢と唱えられるようになったと考えられている。『猫の爪』には開発の残池と考えられる『七つ池の事』というものが記されている。

七つ池というのは内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・観音坊池・嘉右衛門池・しじめ池の七つで昭和の中頃までは現存していた。

内池と言うのは通称学校の池と言われていた池で1ヘクタール近い大きな池であった。（もともとは名主江沢家の内池であった）

池の面には菱が一面に浮いていてシーズンには田船や監船で菱の実を取った思い出を持つ古老も多いはずである。この池は埋め立てられ現在は第二体育館になっている。浅間池・八郎兵衛池は共にマンションに観音坊池は公園になっている。

昭和30年代後半からの人口の急増とバブル期の開発によって大沢の地名の由来を物語っていたこれらの池がすべて姿を消してしまったことは淋しいことである。

#### 修験道の家

真蔵院（蔦原家）元光院（江原家）覚宝院（井上家）という修験の家がある。本家は真蔵院で大沢の草分けの一軒でもある。

このうち真蔵院と元光院は道路やビル建設のため本来の地を移転したが三家とも現存している。覚宝院は現在も自分屋敷内に廟所がある。

#### 宿場の規模

町内は下宿 下組とも言う（現大沢1丁目）中宿 中組とも言う（現2丁目）上宿 上組とも言う（現3丁目）に区画されていたが行政的には1町で名主は1名江沢氏が世襲で名主を勤めた。

戸数・人口・旅籠数等 時代によって異なるが（文政期）幕領で民家48戸 内伝馬屋敷73戸 歩行屋敷5戸 他は地借 店借。

人口（享和2年）1,732人 内 男791人 女941人 女が男を150人上回っている。このことは幕府公認の飯盛旅籠が22軒あり1軒につき2名の飯盛り女を置くことを許されていたことと関係がある。

（天保14年）本陣 1 脇本陣 4 となっている。

名主 江沢家は明治初年戸長を勤めたことを記した石碑が香取神社にあるがその後不明。墓も無縁仏として整理されてしまった。（光明院）

### 宿場町の名残

昭和の初期（昭和10年代）までは 宿場の名残を感じさせるものが 街道沿いに数多く残っていた。

本陣や脇本陣であった 瓦葺きの大きな建物が残っていた。又 街道に面して 共同の井戸が 数カ所残っていた。これらの井戸は 旅人が喉を潤したり 馬に水を飲ませるために利用されたものと思われる。

飯盛り旅籠が整理されて 新開地と呼ばれる遊廓が 赤線廃止まで続けられていた。劇場があった 料理屋や飲み屋が数多く 芸者置屋も数件有り 検番もあった。

住民の気風も 他所者を差別しない おおらかさがあったように感じられる。

戦時中 朝鮮半島出身の人が 埼玉県で2番目に多い町だったことも 宿場町の気風の故と考えられる。

### おわりに

『猫の爪』には 街道に面した町割り図が書かれている。『元禄八検地名所文化九所持之名を記す』と書かれた屋敷割図を見るとき 現在それとわかる家は ほんの数える程しか残っていない。農村分では 開拓の初期から現在まで 連なる家が数多くあるのに比べ 町場で何代も続くことの難しさを 如実に教えられた気がしました。

